声なき 1200 編

表題と写真は、朝日新聞 4 月 6 日夕刊 1 面である。心に響く詩を何度も読み返した。リードから。寝たきりのベッドで詩を書き続ける女性がいる。東京都板橋区の堀江菜穂子さん(20)。脳性まひのため手足はほとんど動かない。わずかに動かせる手でつむいだ詩は約 1200 編。筆談の文字が訴える。「こえをだせないわたしたちにもことばやいしがあることをしってほしい。そんざいをみとめて」

声なき1200編

「ことばやいしがあることをしって」

脳性まひの20歳「いきていてこそ」の詩作

記事に出ていた 4 編の詩を紹介していきたい。

せかいのなかで

このひろいせかいのなかで　　わたしはたったひとり　　たくさんの人のなかで
わたしとおなじ人げんはひとりもいない　　わたしはわたしだけ
それがどんなにふじゆうだとしても　　わたしのかわりはだれもいないのだから
わたしはわたしのじんせいをどうどうといきる　　＝2014 年 8 月

ありがとうのし

いつもいっぱいありがとう　　なかなかいえないけど
いつも心にあふれてる　　いつもいえないありがとうが
いきばをうしなってたまっている
いいたくてもいえないありがとうのかたまりが
めにみえない力になって
あなたのしあわせになったらいいのにな　　＝2012 年 10 月

いきていてこそ

いまのつらさもかんどうも　　すべてはいきていてこそ
どんなにつらいげんじつでも　　はりついていきる

ドアのむこう

そのドアをあけなければ　　けっしてみることのできないことがある
いまそのドアをあけよう

(2015 年 4 月 9 日)